

2025年5月発行

関西大学大学院  
博士課程前期課程  
博士課程後期課程

# 入学試験問題集

---

東アジア文化研究科

---

関西大学大学院

## 目 次

### 春 学 期 入 学

2025年度

#### 博士課程前期課程

##### 一 般 入 学 試 験

〔外 国 語〕…………… 2

##### 外国人留学生入学試験

〔外 国 語〕…………… 7

#### 博士課程後期課程

##### 外国人留学生入学試験

〔外 国 語〕…………… 12

### 秋 学 期 入 学

2024年度

#### 博士課程前期課程

##### 一 般 入 学 試 験

〔外 国 語〕…………… 18

##### 外国人留学生入学試験

〔外 国 語〕…………… 22

#### 博士課程後期課程

##### 外国人留学生入学試験

〔外 国 語〕…………… 26

※出願のあった入試種別・科目のみ掲載しています。(欠席・免除等により受験のなかった科目を除きます。)

著作権の都合上、掲載していない入学試験問題については、窓口にて閲覧することができます。詳細は、関西大学大学院入試情報サイトでご確認ください。

2025年度

[ 春 学 期 入 学 ]

M

# 関西大学大学院入学試験問題

(2月募集)

博士課程前期課程

東アジア文化

研究科

文化交渉学

専攻

一般

科目

日本語 (No. 1)

1 次文を読み、あとの問1～4に答えなさい。

長年、文化人類学者たちの関心の焦点(メシの種)であった「伝統文化」とそれを支えてきた地域は、今大きな危機にさらされている。そうした地域と文化の崩壊を(1)まの当たりにして、良心的な研究者は無力感に苛まれることになる。これは、誠実に努力しようとすればするほど出てくる症状であろうが、無力感からは何も生まれないことも事実であろう。

九学会連合の調査に参加したある研究者が、一番無力を感じたのは、復帰以前の沖縄調査であったという。日本に復帰して、果たして沖縄にいい結果をもたらすか。本土資本に汚染されていくのが目に見えていて、何もすることができなかった。当時の状況では復帰の方法よりも、復帰そのものが関心の的であり、(1)無力を感じた。一体何のための調査であったのか、云々。

かつてコタンに永住することを勧められ、その厚情に感激したが、遂に決行することができなかったという研究者は、アイヌの人達が当面している、もろもろの問題に対して、民族学者や文化人類学者は全く無力であることを痛感するといひ、研究成果の還元など、考えられそうもない、と告白する。ダム建設によって二風谷の聖地が水没するかもしれないというニュースに心を痛めているのみであるという。

無力感とは別の、もうひとつの典型は、研究の成果あるいは研究活動そのものが地域文化のお手本のような役割を果たしてしまう、という可能性である。

刊行した論文や報告書が、現地の人が伝統的民俗文化を実修する際のお手本(シナリオ)となる可能性にどう対応するか。研究者が正しい民俗文化の行ない方を指導する(2)になってよいのか——これは東京での事例であるが、伝承が研究者の録音テープの中にしか残っていない、という例は世界中に数しれない。

さらに、現地の村人への還元は、調査時の相互の関係にすでに始まっているはずである、という指摘もある。研究者が異常なほどに伝統的儀礼に(2)しゅうちゃくしたために、村人自身の間に、伝統の記述の気運を産み出させてしまったという。これが文化の破壊か、ある種の成果の還元かは、ご本人もおっしゃるとおり、にわかには判断できないが、アイヌ語の教室を研究者が主催しているという例を思い起こして興味深い。

すべてを書くことが許されない例をあげれば、口頭伝承が社会的地位と結びついている場合などである。当面は現在生きている人々の生活が第一であることは認めても、一〇〇年後、二〇〇年後に民族の記録として詳細な文書が評価される時もある、という気も一方ではするといふのである。これは、未来の読者に期待する気持ちであるが、やはり研究者の(3)いちぞんでは決めかねる問題であろう。

研究者が声高に研究の学術的意義を主張したり、あるいは逆に無力感にうち沈んだりすることを許さないような地域もある。(3)重なる調査に疲れた地域やアイデンティティの回復の意識が高まっている地域ではその傾向が顕著である。自分たちの生活そのものが存立基盤を失って崩壊しようとしているときに、それには無関心で無関係をよそおう学問に存在意義があるか、という厳しい問いかけの声に直面するのである。

私は、八重山で「研究者やめますか、それとも人間やめますか」というのに近いことを言われ続けているが、他の研究者も、八重山の人々の、(A)を報告している。研究への協力に対して研究者は自分達に何をしてくれるのか、ということが最大の関心であった、という。私自身も、西表島で開催した研究報告シンポジウムの中で漁業と農業と猟に生きる島の青年に次のように言われた。「ふるさとと思う気持ちが少しでもあるなら、世界の宝であり、ぼくらの生活の基盤であるこのすばらしい自然を守るために、もっと研究を進めて、もっともっと力を貸してもらいたい」。

オーストラリアでの経験として「(B)」と聞かれて回答できなかった、という例が報告されている。私も、コンゴ民主(旧ザイール)共和国で「(C)」。そんな差別的なやり方を神様は決してお許しにならないでしょう」と娘さんから抗議を受けたことがある。

これらの経験のあとに、研究者の真剣な自問自答がやってくる。

ある日本の研究者は、調査村落内に(4)極めて深刻な差別状況があるため、研究成果を公表する時は、学術

M

## 関西大学大学院入学試験問題

(2月募集)  
一般

博士課程前期課程

東アジア文化

研究科

文化交渉学

専攻

科目

日本語 (No. 2)

的に問題だという批判を承知のうえ、村の戸数や人口を変え、そのうえ仮称で通しているという。差別解消のために直接的な提言ができない場合は、少々学問的な正確さが犠牲になっても、それは④を得ないという考えである。

㉓「調査研究」そのものの価値がどの程度あるのか。つまり、われわれの研究活動は、「民族」の生活以上の価値をもちうるのか?— D。そんなことでよいのかというこの問いは、私が西表島で永年言われ続けてきたことである。この問いかけに対して、たとえば研究補助金申請の作文では「 E」などと書くことがないとは言えない。⑤、当該の民族の面前でイエスと答える研究者はもはやいないであろう。

「北」の知が「南」に役立ったものは何だろう?—コロンブス以来の五〇〇年間、結局何ひとつなかったじゃないか、という⑥呪詛に近い声が世界の各地から響くようになってきた。調査した土地や民族の運命と無関係なふりや論文づくりがまったく通用しない時代がいよいよやって来たのだということであろう。

宮本常一・安溪遊地『調査されるという迷惑：フィールドに出る前に読んでおく本（増補版）』みずのわ出版、2024年（初版は2008年）、106-108頁（原文中の注記で設問の内容にかかわらないものは省略しています）

問1 文中の下線部(1)～(5)のひらがなは漢字に、漢字はひらがなに改めなさい。

問2 文中の空欄 A ～ E に入る文を次の(ア)～(オ)から選び、その記号を記しなさい。

- (ア) このような今まさに滅びようとする生活様式の正確な記述は、焦眉の急である  
(イ) あなたは、この言葉も習慣も調べてわかるようになったのに、お返しに日本語さえ教えてくれない  
(ウ) 研究者への懐疑の念  
(エ) もう一〇〇年以上調査してきてまだわからないのか  
(オ) 地域ほろんで学問栄える

問3 文中の①～⑤に入れるのに最も適当な語句をそれぞれの語群から一つ選び、その記号を記しなさい。

- ① (ア ゆめゆめ    イ つくづく    ウ そもそも    エ せいぜい )  
② (ア トメ    イ キメ    ウ ツメ    エ ハメ )  
③ (ア たび    イ まる    ウ とき    エ ゆれ )  
④ (ア あり    イ みず    ウ 要領    エ やむ )  
⑤ (ア だから    イ しかし    ウ つまり    エ もし )

問4 文中の波線部[x]について、研究者の葛藤を文中に挙げられている例を示しながら説明しなさい。

M

# 関西大学大学院入学試験問題

(2月募集)  
留学生

博士課程前期課程

東アジア文化

研究科

文化交渉学

専攻

科目

日本語 (No. 1)

1 次本文を読み、あとの問1～4に答えなさい。

長年、文化人類学者たちの関心の焦点(メシの種)であった「伝統文化」とそれを支えてきた地域は、今大きな危機にさらされている。そうした地域と文化の崩壊を(1)まの当たりにして、良心的な研究者は無力感に苛まれることになる。これは、誠実に努力しようとすればするほど出てくる症状であろうが、無力感からは何も生まれないことも事実であろう。

九学会連合の調査に参加したある研究者が、一番無力を感じたのは、復帰以前の沖縄調査であったという。日本に復帰して、果たして沖縄によい結果をもたらすか。本土資本に汚染されていくのが目に見えていて、何もすることができなかった。当時の状況では復帰の方法よりも、復帰そのものが関心の的であり、(2)無力を感じた。一体何のための調査であったのか、云々。

かつてコタンに永住することを勧められ、その厚情に感激したが、遂に決行することができなかったという研究者は、アイヌの人達が当面している、もろもろの問題に対して、民族学者や文化人類学者は全く無力であることを痛感するといひ、研究成果の還元など、考えられそうもない、と告白する。ダム建設によって二風谷の聖地が水没するかもしれないというニュースに心を痛めているのみであるという。

無力感とは別の、もうひとつの典型は、研究の成果あるいは研究活動そのものが地域文化のお手本のような役割を果たしてしまう、という可能性である。

刊行した論文や報告書が、現地の人が伝統的民俗文化を実修する際のお手本(シナリオ)となる可能性にどう対応するか。研究者が正しい民俗文化の行ない方を指導する(3)になってよいのか?——これは東京での事例であるが、伝承が研究者の録音テープの中にしか残っていない、という例は世界中に数しれない。

さらに、現地の村人への還元は、調査時の相互の関係にすでに始まっているはずである、という指摘もある。研究者が異常なほどに伝統的儀礼に(4)しゅうちやくしたために、村人自身の間に、伝統の記述の気運を産み出させてしまったという。これが文化の破壊か、ある種の成果の還元かは、ご本人もおっしゃるとおり、にわかには判断できないが、アイヌ語の教室を研究者が主催しているという例を思い起こして興味深い。

すべてを書くことが許されない例をあげれば、口頭伝承が社会的地位と結びついている場合などである。当面は現在生きている人々の生活が第一であることは認めても、一〇〇年後、二〇〇年後に民族の記録として詳細な文書が評価される時もある、という気も一方ではするといふのである。これは、未来の読者に期待する気持ちであるが、やはり研究者の(5)いちぞんでは決めかねる問題であろう。

研究者が声高に研究の学術的意義を主張したり、あるいは逆に無力感にうち沈んだりすることを許さないような地域もある。(6)重なる調査に疲れた地域やアイデンティティの回復の意識が高まっている地域ではその傾向が顕著である。自分たちの生活そのものが存立基盤を失って崩壊しようとしているときに、それには無関心で無関係をよそおう学問に存在意義があるか、という厳しい問いかけの声に直面するのである。

私は、八重山で「研究者やめますか、それとも人間やめますか」というのに近いことを言われ続けているが、他の研究者も、八重山の人々の、(7)Aを報告している。研究への協力に対して研究者は自分達に何をしてくれるのか、ということが最大の関心であった、という。私自身も、西表島で開催した研究報告シンポジウムの中で漁業と農業と猟に生きる島の青年に次のように言われた。「ふるさと思ふ気持ちが少しでもあるなら、世界の宝であり、ぼくらの生活の基盤であるこのすばらしい自然を守るために、もっと研究を進めて、もっともっと力を貸してもらいたい」。

オーストラリアでの経験として「(8)B」と聞かれて回答できなかった、という例が報告されている。私も、コンゴ民主(旧ザイール)共和国で「(9)C」。そんな差別的なやり方を神様は決してお許しにならないでしょう」と娘さんから抗議を受けたことがある。

これらの経験のあとに、研究者の真剣な自問自答がやってくる。

ある日本の研究者は、調査村落内に(10)極めて深刻な差別状況があるため、研究成果を公表する時は、学術



M

# 関西大学大学院入学試験問題

(2月募集)  
留学生

博士課程前期課程

東アジア文化

研究科

文化交渉学

専攻

科目

日本語 (No. 2)

的に問題だという批判を承知のうえ、村の戸数や人口を変え、そのうえ仮称で通しているという。差別解消のために直接的な提言ができない場合は、少々学問的な正確さが犠牲になっても、それは④を得ないという考えである。

㍿「調査研究」そのものの価値がどの程度あるのか。つまり、われわれの研究活動は、「民族」の生活以上の価値をもちうるのか?— D。そんなことでよいのかというこの問いは、私が西表島で永年言われ続けてきたことである。この問いかけに対して、たとえば研究補助金申請の作文では「 E」など書くことがないとは言えない。⑤、当該の民族の面前でイエスと答える研究者はもはやいないであろう。

「北」の知が「南」に役立ったものは何だろう?—コロンブス以来の五〇〇年間、結局何ひとつなかったじゃないか、という㉔呪詛に近い声が世界の各地から響くようになってきた。調査した土地や民族の運命と無関係なふりや論文づくりがまったく通用しない時代がよいよやって来たのだということであろう。

宮本常一・安溪遊地『調査されるという迷惑：フィールドに出る前に読んでおく本（増補版）』みずのわ出版、2024年（初版は2008年）、106-108頁（原文中の注記で設問の内容にかかわらないものは省略しています）

問1 文中の下線部(1)～(5)のひらがなは漢字に、漢字はひらがなに変更なさい。

問2 文中の空欄 A ～ E に入る文を次の(ア)～(オ)から選び、その記号を記しなさい。

- (ア) このような今まさに滅びようとする生活様式の正確な記述は、焦眉の急である
- (イ) あなたは、この言葉も習慣も調べてわかるようになったのに、お返しに日本語さえ教えてくれない
- (ウ) 研究者への懐疑の念
- (エ) もう一〇〇年以上調査してきてまだわからないのか
- (オ) 地域ほろんで学問栄える

問3 文中の①～⑤に入れるのに最も適当な語句をそれぞれの語群から一つ選び、その記号を記しなさい。

- ① (ア ゆめゆめ    イ つくづく    ウ そもそも    エ せいぜい )
- ② (ア トメ        イ キメ        ウ ツメ        エ ハメ )
- ③ (ア たび        イ まる        ウ とき        エ ゆれ )
- ④ (ア あり        イ みず        ウ 要領        エ やむ )
- ⑤ (ア だから     イ しかし     ウ つまり     エ もし )

問4 文中の波線部[x]について、研究者の葛藤を文中に挙げられている例を示しながら説明しなさい。

D

## 関西大学大学院入学試験問題

(2月募集)  
留学生

博士課程後期課程

東アジア文化

研究科

文化交渉学

専攻

科目

日本語 (No. 1)

1 次の文を読み、あとの問1～5に答えなさい。

人間を対象とする野外科学の場合、研究成果の公表と還元は、フィールド・ワークを実施する前から充分に考慮しておくべき問題である。

研究の成果を発表して、被調査地域の人々がそれを読んだとすると、相手に迷惑がかかるのではないかとこの反省を、フィールド・ワーク中からくりかえしていないと、(1) けんざい化する、しないにかかわらず問題を引き起こすことがある。

一九七二年ごろ、日本のある研究者が民族学関係のある雑誌に韓国の旅行記風の随筆を書いた。その中で、韓国における中央情報部と研究者の緊張関係が曝露風に記されていたことが問題となり、執筆者と無関係の日本人若手研究者が韓国の文化人類学会の理事会に呼ばれ、日本人の研究姿勢等について詰問されるという事件が起った。(2) 随筆を書いた時、問題になるとは思わなかった、ということであろうが、深い考えもなく書いたものが日本人研究者全体への不信にまで発展しかねなかった例である。

いわゆる“インフォーマント”( A と私は思う) のライフヒストリー等について、現地の人々の目には直接ふれない物に書いてきた、という若手研究者がいる。論文の場合、流行小説と違って読者層が限られているため、問題は起らなかったというのである。

しかし、いつもこのような研究者側の期待どおりに事がはこぶとはかぎらない。調査報告書を話者に送り、高齢者にも読み易いようにと、言葉づかいにもかなり配慮してきたというベテランの研究者でも、本人の目に触れることは絶対にあるまいと考えて (3) 実名のまま公表したところ、別の研究者がそのデータを無思慮に引用し、本人の目に触れることになってしまう危険性がでてきたということがあった。

方言調査の例では、ある村の方言がまわりの村々と違い、その理由は、被差別部落であることだと推定されたのだが、そこだけを空白にすることもできず、和文報告書では理由を述べずに方言の違いという事実だけを書いた。それだけの配慮をした研究者も、英文解説の中ではこれ幸いとはっきりと書いてしまった。しかし、例えば、その村からは英語が読める人が将来にわたって出ないだろうという推定には何の根拠もないであろう。

これらの例の背後には、研究者は、例えば学会誌や英語論文といった被調査者には越えがたい「専門性」という (4) 砦にいつでも閉じこもることができるのだという考えがひそんでいるのではないかと。しかし、そのような考えはもはや幻想である。砦の安全を保証していると一部の研究者が信じてきた壁は急速に (5) くずれつつある。

…… [中略] ……

長年、文化人類学者たちの関心の焦点(メシの種)であった「伝統文化」とそれを支えてきた地域は、今大きな危機にさらされている。そうした地域と文化の崩壊を (6) まのあたりにして、良心的な研究者は無力感に苛まれることになる。これは、誠実に努力しようとすればするほど出てくる症状であろうが、無力感からは何も生まれないことも事実であろう。

九学会連合の調査に参加したある研究者が、一番無力を感じたのは、復帰以前の沖縄調査であったという。日本に復帰して、果たして沖縄によい結果をもたらすか。本土資本に汚染されていくのが目に見えていて、何もすることができなかった。当時の状況では復帰の方法よりも、復帰そのものが関心の的であり、 (7) 無力を感じた。一体何のための調査であったのか、云々。

かつてコタンに永住することを勧められ、その厚情に感激したが、遂に決行することができなかったという研究者は、アイヌの人達が当面している、もろもろの問題に対して、民族学者や文化人類学者は全く無力であることを痛感するといひ、研究成果の還元など、考えられそうもない、と告白する。ダム建設によって二風谷の聖地が水没するかもしれないというニュースに心を痛めているのみであるという。

無力感とは別の、もうひとつの典型は、研究の成果あるいは研究活動そのものが地域文化のお手本のような



D

## 関西大学大学院入学試験問題

(2月募集)  
留学生

博士課程後期課程

東アジア文化

研究科

文化交渉学

専攻

科目

日本語 (No. 2)

役割を果たしてしまう、という可能性である。

刊行した論文や報告書が、現地の人が伝統的民俗文化を実修する際のお手本（シナリオ）となる可能性にどう対応するか。研究者が正しい民俗文化の行ない方を指導する〔②〕になってよいのか？——これは東京での事例であるが、伝承が研究者の録音テープの中にしか残っていない、という例は世界中に数しれない。

さらに、現地の村人への還元は、調査時の相互の関係にすでに始まっているはずである、という指摘もある。研究者が異常なほどに伝統的儀礼に〔⑦〕しゅうちゃくしたために、村人自身の間に、伝統の記述の気運を産み出させてしまったという。これが文化の破壊か、ある種の成果の還元かは、ご本人もおっしゃるとおり、にわかには判断できないが、アイヌ語の教室を研究者が主催しているという例を思い起こして興味深い。

すべてを書くことが許されない例をあげれば、口頭伝承が社会的地位と結びついている場合などである。当面は現在生きている人々の生活が第一であることは認めても、一〇〇年後、二〇〇年後に民族の記録として詳細な文書が評価される時もある、という気も一方ではするといふのである。これは、未来の読者に期待する気持ちであるが、やはり研究者の〔⑧〕いちぞんでは決めかねる問題であろう。

研究者が声高に研究の学術的意義を主張したり、あるいは逆に無力感にうち沈んだりすることを許さないような地域もある。〔③〕重なる調査に疲れた地域やアイデンティティの回復の意識が高まっている地域ではその傾向が顕著である。自分たちの生活そのものが存立基盤を失って崩壊しようとしているときに、それには無関心で無関係をよそおう学問に存在意義があるか、という厳しい問いかけの声に直面するのである。

私は、八重山で「研究者やめますか、それとも人間やめますか」というのに近いことを言われ続けているが、他の研究者も、八重山の人々の、〔B〕を報告している。研究への協力に対して研究者は自分達に何をしてくれるのか、ということが最大の関心であった、という。私自身も、西表島で開催した研究報告シンポジウムの中で漁業と農業と猟に生きる島の青年に次のように言われた。「ふるさと思ふ気持ちが少しでもあるなら、世界の宝であり、ぼくらの生活の基盤であるこのすばらしい自然を守るために、もっと研究を進めて、もっともっと力を貸してもらいたい」。

オーストラリアでの経験として「〔C〕」と聞かれて回答できなかった、という例が報告されている。私も、コンゴ民主（旧ザイール）共和国で「〔D〕。そんな差別的なやり方を神様は決してお許しにならないでしょう」と娘さんから抗議を受けたことがある。

これらの経験のあとに、研究者の真剣な自問自答がやってくる。

ある日本の研究者は、調査村落内に〔⑨〕極めて深刻な差別状況があるため、研究成果を公表する時は、学術的に問題だという批判を承知のうえ、村の戸数や人口を変え、そのうえ仮称で通しているという。差別解消のために直接的な提言ができない場合は、少々学問的な正確さが犠牲になっても、それは〔④〕を得ないという考えである。

〔④〕「調査研究」そのものの価値がどの程度あるのか。つまり、われわれの研究活動は、「民族」の生活以上の価値をもちうるのか？——地域ほろんで学問栄える。そんなことでよいのかというこの問いは、私が西表島で永年言われ続けてきたことである。この問いかけに対して、たとえば研究補助金申請の作文では「〔E〕」など書くことがないとは言えない。〔⑤〕、当該の民族の面前でイエスと答える研究者はもはやいないであろう。

「北」の知が「南」に役立ったものは何だろう？——コロンブス以来の五〇〇年間、結局何ひとつなかったじゃないか、という〔⑩〕呪詛に近い声が世界の各地から響くようになってきた。調査した土地や民族の運命と無関係なふりや論文づくりがまったく通用しない時代がいよいよやって来たのだということであろう。

宮本常一・安溪遊地『調査されるという迷惑：フィールドに出る前に読んでおく本（増補版）』みずのわ出版、

2024年（初版は2008年）、100-101頁、106-108頁（原文中の注記で設問の内容にかかわらないものは省略しています）

D

(2月募集)  
留学生

## 関西大学大学院入学試験問題

博士課程後期課程

東アジア文化

研究科

文化交渉学

専攻

科目

日本語 (No. 3)

問1 文中の下線部(1)～(10)のひらがなは漢字に、漢字はひらがなに改めなさい。

問2 文中の空欄  ～  に入る文を次の(ア)～(オ)から選び、その記号を記しなさい。

(ア) このような今まさに減じようとする生活様式の正確な記述は、焦眉の急である

(イ) あなたは、ここの言葉も習慣も調べてわかるようになったのに、お返しに日本語さえ教えてくれない

(ウ) 研究者への懐疑の念

(エ) もう一〇〇年以上調査してきてまだわからないのか

(オ) 情報が研究者に向かって一方的に流れるのが当然といわんばかりの用語だ

問3 文中の  ～  に入れるのに最も適当な語句をそれぞれの語群から一つ選び、その記号を記しなさい。

① (ア ゆめゆめ イ つくづく ウ そもそも エ せいぜい )

② (ア トメ イ キメ ウ ツメ エ ハメ )

③ (ア たび イ まる ウ とき エ ゆれ )

④ (ア あり イ みず ウ 要領 エ やむ )

⑤ (ア だから イ しかし ウ つまり エ もし )

問4 文中の波線部[x]について、研究成果の発表によって被調査地域に迷惑がかかるとはどういうことか、文中に挙げられている例を示しながら具体的に説明しなさい。

問5 文中の波線部[y]について、研究者の葛藤を文中に挙げられている例を示しながら説明しなさい。

2 あなたが本研究科で研究しようとするテーマについて、文化交渉学と関連付けて日本語で詳しく、わかりやすく説明しなさい。

以上

## 関西大学大学院

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35  
TEL 06-6368-1121 (大代表)